

エリザベス・ギヤスケル 『北と南』—ミルトンへの道

多比羅 真理子

1. はじめに

エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810~65) はチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812~70) が主宰するハウスホールド・ワーズ (*Household Words*) 誌に長編小説『北と南 (*North and South*)』を連載した。それは、1854年9月から55年1月までにわたり、ギヤスケルにとり長編小説としては第三作目である。彼女のデビュー作で、工場経営者と労働者の対立と労働者たちの悲惨な生活ぶりを描いた『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848) と同じような社会小説をディケンズに要望されて執筆したものであった。

作品では、主人公マーガレット・ヘイル (Margaret Hale) が英国国教会の牧師である父親の聖職離脱を機に、教区があった南の田舎町ヘルストン (Helstone) から、北の産業都市ミルトン (Milton, マンチェスターを模したとされる¹⁾ へ移住する。この移住に伴う様々な生活様式や意識の隔たり、そして両親との永久の別れなどを経験したマーガレットがたどる道のりが、産業都市ミルトンの労働者との交わりや、工場主ジョン・ソーントン (John Thornton) との結びつきを含めて描き出されている。従って、当初、ギヤスケルはタイトルを『マーガレット・ヘイル』と想定していたが、ディケンズが南北の対立を意味する『北と南』にするよう提言し、決定に至るという経緯があった。確かに本作品は、主人公のマーガレット・ヘイルの生き方と対応して、南イングランドの平和な家父長制度下にある農村地域の文明と、北イングランドの激烈で革新的気風にあふれた工業地帯の文明との対比が描かれている²⁾。

本論では共通テーマである「旅する女性たち」という視点で、南の地から北へ生活の拠点を移すという「旅」がマーガレットに及ぼす影響を解釈する。

2. ロンドンとヘルストン

物語の冒頭、マーガレットは両親が住むヘルストンから離れ、ヘルストンと同じ南部のロンドン、ハーレー街の邸宅で母方の叔母ミセス・ショウ (Mrs. Shaw) と美しい従妹イーデイス (Edith) と共に住み、上流階級の生活を送っている。数日後にはイーデイスは結婚式を控えている。彼女の結婚相手は、ショウ家の階級にふさわしい海軍大佐のレノックス (Captain Lennox) である。イーデイスの結婚式の後、マーガレットは10年振りに両親の住むヘルストンに帰ることになっていた。ソファで転た寝をしているイーデイスに代わって、マーガレットはインド製のショールを来客に見せるために持ってくる。そのショールは今亡き夫(彼は將軍であった)が妻のミセス・ショウに贈ったものだった。今回イーデイスの結婚を機に彼女に譲られたのだが、それは近隣の娘を持つ裕福な母親たちから羨望と賞賛のまなざしで見つめられる高価で良質の品であった。

マーガレットはシャンデリアの下にまっすぐに立った。叔母がショールの襷を直している間、彼女は静かに、そしてされるがままその場に立っていた。(39)³ (傍点は筆者)

ショールをかけられたマーガレットの姿は全く受動的である。J・ユークロウ (Jenny Uglow) は、その時のマーガレットが経験が乏しく、絶えずおどおどした幼い子供のものであるととらえる⁴。後にマーガレットが「ロンドンにはあくせく働く人がいたかもしれないが、見たこともなかった。召使は自分たちの世界の地下で生活して、その世界の希望や恐れも知ることはなかった」(458) と回想するように、ロンドンでの生活は限られた上流階級社会の人々との社交が中心で、マーガレットはイーデイスと共にショウ家という存在に守られ、その枠から足を踏み出さず、豊かな生活を享受する娘に他ならない。しかし、あまり物事を深く考えないイーデイスとは異なり、マーガレットは強さと聡明さを内に秘めている。それは、10歳にもならないうちから親元を離れ、ロンドンの叔母の家で育ったことが影響してか、自己を極力表面に出さないことを幼くして身につけていたものと解釈できる。物語の冒頭で登場するイーデイスの眠る姿と同じく、マーガレットが持つ本来の資質は眠っていたのである。

マーガレットがロンドンに滞在中、キャプテン・レノックスの弟で弁護士
のヘンリに、故郷のヘルストンを「教会もない本当に小さな村のような村、
そう、まるでテニソンの詩に出てくるような村ですわ」(42) とその美しさを
語る。「現実の生活にある村というより、物語の中にある村のようですね」と
答えるヘンリの表現には、マーガレットが戻ったヘルストンも「まるで森の
中にある巣のように」(42)、ロンドンのハーレー街の家と同じく現実の様々
な問題をはらむ社会から隔離された世界であることを暗示している。

母親のミセス・ヘイルは、自分の結婚に際して、南部の街のラトランド
シャー、オグゼンハムの州長官であるジョン・ブレスフォード卿 (Sir John
Bresford) の娘でありながら、愛を優先し、家族の反対を押し切って田舎の
教区牧師であるミスター・ヘイルとの結婚を選んだ。一方、妹は彼女とは対
照的に結婚相手への愛情よりも、まず第一に社会的、経済的に釣り合いのと
れた結婚をした。しかし、今ではミセス・ヘイルは、娘時代の贅沢で華やか
な生活や、妹のロンドンでの生活ぶりと現実の我が身とのあまりの隔たりに、
日々夫への不満を募らせている。マーガレットには、ヘルストンはバラが辺
り一面咲き乱れ、静かで自然豊かな、世界中で一番素晴らしい場所 (60) で
あるが、ミセス・ヘイルには森におおわれた閉塞感漂わせる場所ではない。
このようなことから経済的に豊かな男性を結婚相手として母親が考えている
ことを察したマーガレットは次のように述べる。

「ゴーマン家の人。その人たちってサザンプトンで商売をしてお金を
もうけた人たちでしょう?.....私は商売をする人は好きではないわ。
農家の人や農場で働く人たち、それに見栄を張らない人たちと知り合
いになった方がずっといいわ」(50)

マーガレットの姿勢には商売で生計を立てる人々への偏見と傲慢さが漂
う。A・ポラード (Arthur Pollard) は、彼女も母親のミセス・ヘイル同様、
貴族主義的な価値観に立っていると指摘する⁵。

マーガレットがヘルストンに戻って3か月後、父親のミスター・ヘイルが
突然聖職離脱をマーガレットに告げる。それはロンドンでの生活には及ばな
いまでも、今までの牧師として社会から認められた幸せな生活を捨て去るこ
とを意味した。ミセス・ヘイルだけでなく、マーガレットも父親の真意をつ
かみ切れないまま、そしてこの現実を受けがたい思いで、一家は慌ただしく

ヘルストンを去り、北の産業都市ミルトンへ移住する。その地はミスター・ヘイルのオックスフォード時代の指導教官で、マーガレットの名付け親であるミスター・ベル（Mr. Bell）の生まれ故郷である。彼はミルトンに多くの資産を持っていた。そのミスター・ベルの紹介でミスター・ヘイルはミルトンの新居で古典語の個人家庭教師をすることになった。

一家はまずロンドンへと向かう。ロンドンは、ミセス・ヘイルやマーガレットがかつて楽しく、贅沢な日々を送った場所である。しかし、イーディスやミセス・ショウはキャプテン・レノックスの駐屯先であるイタリアのコーフへ旅立ったため一家は訪ねる人もない。馬車の窓から、いつも訪れていた高級店や街並みを眺めるのみである。ホテルに宿をとった彼らは、定まる場所のない孤独な旅人に他ならない。

イーディスたちが大陸南部の暖かな地へ幸せな旅立ちをしたのとは対照的に、マーガレットは寒い北の地へ新しい土地での生活に不安に満ちた旅立ちだった。

F・ボナバルト（Felicia Bonapart）やC・ランズベリー（Carol Lansbury）はイギリス南部は、精神構造やその価値観などあらゆる点で受け身の、かつ閉塞感の漂う女性領域で、その中心はロンドンであり、対して北部は精力的で躍動感溢れる行動的な男性領域で、その中心がマンチェスターであると分類している⁶。ロンドンを中心とする南の地は、農業や田園のイギリス従来の価値観を持つ封建的な伝統社会である。その社会を象徴するのが馬車とすると、北の新しい産業を中心とする革新社会を象徴するのが鉄道である。従って、マーガレットたちがミルトンへ移住に際して、ロンドンの街を馬車で移動する様子をギヤスケルが描写したことは、ヘイル家の人々が長らく南の地に住み、その精神構造、価値観が南の貴族主義的な世界に属していることを示す意味で必然的なことであった。

3. ミルトンへ

南の地ロンドンから全く未知の新世界である北の産業都市ミルトンへミスター・ヘイル、ミセス・ヘイル、マーガレットそして、ミセス・ヘイルの娘時代からの召使であるディクソンの四人は鉄道で向かった⁷。

「ミルトンに着く数マイル前から、街のある方向の水平線に濃い鉛色

をした雲がかかっているのが見えた。それは、冬の空の薄く灰色がかつた青い空と比べてみると非常に暗い色をしていた。・・・街に近づくとつれて、煙のかすかな味と臭いがしてきた。それは何かはっきりした味や臭いがあるというより、草や牧草の香りが全くしないせいだったからだろう」(96)

ミルトンの街では、道路は綿を運ぶ荷馬車で溢れかえり、人々は歩道に群がり、そして、レンガづくりではあるが小さい家屋や長方形の窓がある工場が建ち並び、濃霧が白い渦巻となって家の中に入り込む。マーガレットたちを待っていたのはミスター・ベルの借地人で、ミスター・ヘイルから古典語の指導を受けることになっている若き工場主のジョン・ソートンである。

彼は16年前、多額の投資に失敗して自殺をした父親に代わって一家の大黒柱となりミルトンを離れ、田舎で反物商として辛酸をなめながら必死に働き成功を取めた人物である。そしてミルトンに戻ると父親の負債を返し、自ら新たに工場をおこして、現在はその名がミルトンの街だけでなく、大陸まで知られるほどとなり、かつ、治安判事を務めている。まさに北部の新興ブルジョワジーを代表する人物であり、実学を重んじ、勤勉と節約、努力を惜しまない自助セルフ・ヘルプを体現する人として登場する。ミルトンの街を誇り、この文明社会の開拓者になるという使命感に燃えている(170)。何よりも自己が正しいと信ずることを実践する男性である。母親のミセス・ソートンは息子をこよなく信頼し誇る気丈な女性である。ギヤスケルはこの若く強い北を代表する人物にソートン(Thornton)という名を授けた。ユェグロウは彼の姓はとげとげしい性格を表すものと指摘している⁸。J・G・シャープス(John Geoffery Sharps)も彼の激しい性格を認めるが、同時に基本的にあらゆる場面において彼が正直な人間であるとも分析する⁹。

二人が、初めて会ったのは、ミルトンに着いたばかりのことだった。マーガレットは南での裕福な生活ぶりを象徴するように、地味ではあるが、明らかに最高の材料で編まれた麦わら帽子と飾りけのないドレスを身につけ、そして、長くどっしりした折り畳み襷のある大きなインド製の肩掛けをかけていた(99)。その姿は威厳があり洗練された物腰でソートンを圧倒する。彼はマーガレットに対してその美しさと上品な様子に心ひかれるが、同時に彼女の傲慢な様子に不愉快さと反感を抱く。マーガレットはその後の両親との会話であからさまに工場経営者を商売人呼ばわりをして、父親からたしな

められるほどの偏見を表す(102)。両者の関係は、ジェイン・オースティン(Jane Austen)の『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813)におけるダーシー(Darcy)とエリザベス(Elizabeth)の関係を思い起こさせる。しかし彼らとは異なってソーントンとマーガレットは互いに属する階級も異なり、両者はそれぞれの世界に未知であったことが、とりわけマーガレットの偏見を強めることになった。後にソーントンはロンドンを含め南の地は貴族的な古い型にはまったうっとうしい世界であるが、ミルトンこそ、自分自身の力によって階級や経済力が生まれ、雇用者と労働者の二つの階級に闘争が起きたとしても、それは当然の流れであると産業構造を力説する。この発言を聞いて、南を中傷されたと傷ついたマーガレットは「あなたは南について何もご存じないのです」(122)と反論する。ソーントンも「では、あなたが北のことを知らない、と申し上げましょうか」(123)と述べて、両者の隔たりが明らかにされている。

4. ミルトンでのマーガレット

ミルトンでの生活が始まった。まず、マーガレットはディクソンを手伝う下働きの使用人を探しに一人で人通りの多い、騒がしい街へ、それも肉屋や雑貨店の間を、そして工場街を探して歩くこととなった。

イーディスによると「一人で街を歩き回るのは、レディにはふさわしくないこと」(520)である。しかし、マーガレットが一人ミルトンの街を歩く姿には、従来の、そしてマーガレットが属する階級でふさわしいとされる女性像—他者へ依存し、決して自己主張することなく親や夫、さらには彼女たちが帰属する社会に従属する存在—という状況から一歩足を踏み出さざるを得ない厳しい現実の状況を示す事例としてギヤスケルは描いている。

しかし、マーガレットの中では、すでにヘルストンで従来の良家の子女の理想とされる女性像から脱却する兆しが見られるのである。それはミルトンに来る直前、ヘルストンを訪ねたヘンリ・レノックスに求婚された時のことである。ヘンリは彼女の階級の結婚相手としては何ら問題なく、誰からも祝福を必ず受ける彼との結婚に対して、友人以上の感情が持てないという理由で、親に全く相談することなく即座に自分の意思で拒絶している(62)。その同じ日、ミスター・ヘイルが聖職離脱を最初に伝えたのはマーガレットである。彼はこの決意を妻に語る勇気がなく、自分に代わってその事実を妻に

伝えるという重要な役割をマーガレットに託す(66,69)。その後、夫の真意を理解できず、社会的地位を失うことのみを気を取られ、悲嘆に泣きくれる母親、また、自己の信条に従って決定したことではあるが、家族に大きな犠牲を払わせることとなった現実におそれおののき、自信を失う父親に代わってミルトンへの移住の算段や新居の決定などすべてをマーガレットが背向う(92)¹⁰。こうしてヘンリの求婚を拒絶した日を起点として、マーガレットの存在は親から庇護を受け、ヘルストンの巣の中でまどろむか弱い娘の立場から、家長としての男性領域へと足を踏み入れたのだった。そして家長だった父親のミスター・ヘイルは、以後、マーガレットの話し相手の存在として男性領域から女性領域へと立場の転換が行われてゆく。こうして女性の地とされる南の地ヘルストンから、男性の地ミルトンへの物理的な移動の時期と対応して、マーガレットの内面でも実質的に女性領域から男性領域への転換が始まっていたのだった。

一人で歩き始めたマーガレット。彼女は街で、工場労働者のニコラス・ヒギンズ(Nicholas Higgins)と、娘のベッシー(Bessy)と偶然言葉を交わすようになる。ベッシーはマーガレットと同じ19歳だが、換気の悪い紡績工場で働いたため、浮遊綿毛が原因で肺を病み明日の命も保証されていない。ヒギンズは教育もなく、酒をこの上なく好むが、勤勉で、正直、そして労働組合の幹部でもある。そして何よりも彼は、自己の目を見たものを信じ、階級や身分にこだわらずに自分の思いを率直に語る人間だった。立場は異なるが、ヒギンズとソートンとの共通性がここに見られ、後に二人が対等な関係で生産に携わるようになる姿を暗示させる。

マーガレットが南のハンプシャーからミルトンへ来たと聞いてヒギンズはこう語る。

「それはロンドンの向こう側ですよ。わしは北から40マイル離れたバーリンからやって来たんですよ。それじゃ、北と南がこれでっかい、黒煙だらけの所であって、友だちになったんだ」(112)

ヒギンズのこの言葉を聞いて、マーガレットは彼に対して、また、彼の住む町ミルトンに興味を抱くようになる。父親の突然の聖職離脱によって信仰と生活基盤が根本的から揺らいでいるマーガレットは、自らの力を信じ力強

く優しいヒギンズと、自らの死を含めて現実を素直に受け止めるベッシーを通して新たな活力が与えられるのだった。さらにマーガレットが今まで知ることがなかった工場労働者の生活やその苦しみ、さらには各地で起こっている工場主と労働者の戦いやストライキの存在とその意味をヒギンズの言葉で教えられ、彼女の世界は確実に広がってくる。

「マーガレット、お願いだから『ぐず』だなんて恐ろしい言葉を使うのになれないで、それはミルトンの方言ですよ・・・」

「工場の街に住んだのなら、必要などときには工場の言葉を話さなければならぬよ」(301)

という母娘の会話に見られるように、マーガレットは工場労働者のヒギンズ、その娘のベッシーを知ったことで次第にミルトンの街を受容していくのだった。

こうした時、ミルトンの工場でストライキが起こる。それは、諸外国との市場競争に対応するために労働者の賃金を抑えようとする雇用者側と、好景気の時のように高い賃金を要求する労働者側とが対立したためだった。受注した注文を消化するためソーントンが安い賃金でアイルランドから労働者を雇い入れたことが契機となり、怒りを爆発させた労働者たちはソーントンの工場を襲撃する。その場に偶然居合わせたマーガレット。彼女は群衆の中にヒギンズの隣人の労働者の姿を見つける。さらに暴動を鎮静化する兵士たちが来ることを知ったマーガレットはソーントンに、「同じ人間として」群衆に分別を取り戻すように語りかけ事態の解決を図るようにと懇願する。マーガレットの言葉につき動かされるようにして、ソーントンが一人群衆の前に出た時、彼めがけて木靴を投げようとする労働者に気づき、マーガレットは即座にソーントンの前に飛び出し、労働者たちには暴力を振るわないようにと叫ぶ。しかし怒り狂った群衆にマーガレットの言葉は伝わらない。その時小石が空を切って飛んできて、ソーントンの体に腕をまわして楯となったマーガレットの額にぶつかる。額から流れる赤い血を見た群衆は我に返ると、その場からこそこそと逃げ去るのだった(232)。こうしてソーントンの工場襲撃は終わった。マーガレットがソーントンを守った行為は、彼女が彼を愛しているためだとソーントンに思わせ、かつ自分自身の彼女への愛を意識させ、

彼は翌日愛を告白する。しかし、マーガレットは、「人を助けるのは当然のこと」として彼の愛を受け入れなかった。(253)

しかし、ソートン自身のマーガレットに寄せる想いは深まる一方であり、彼は様々な形でヘイル家へ援助の手を差し伸べるのだった。

その後、ミセス・ヘイルは亡くなる。母の葬儀に際して、マーガレットは父親にはっきりと従来自分たちが属していた階級と、現在のミルトンに住む労働者の女性の違いを明言して、自らの意思で葬儀へ参列する。

「私たちの階級の女性は感情を抑えることができません。しかも、感情を表すことは恥ずかしいことなので、葬儀には行かないのです。でも、貧しい人たちは行きます。自分たちが悲しみに打ちひしがれている姿を見られても気にしません。もし葬儀に行かせてもらえるのなら、迷惑をおかけしないとお約束します」(336)

マーガレットは、ソートンの工場襲撃の時に体を張って示したように、階級や立場で行動するのではなく、人として正しいと思うことをひるむことなく行動する強靭さを兼ねそなえた女性へと変化を遂げる。北の地のミルトンでマーガレットは、もはや、ロンドンやヘルストンで過ごしたような南の伝統的枠組みの中に住む、か弱く従順なだけの女性ではない。「ミルトンは臆病者の住む町ではない、ミルトンで暮らすのなら、勇敢な心を持つことを覚えなければならない」(163) とミルトンを誇るミセス・ソートンが語ったように、正にマーガレットはミルトンに住むにふさわしい強い女性になったのだった。

ミルトンへの移住が妻の死を引き起こしたとして自己を責め、自信を全く失った父親に代わって、ディクソンもマーガレットを主人として扱うようになるが、ミスター・ヘイルもオックスフォードにミスター・ベルを訪ねた折心臓発作で突然亡くなり、マーガレットは一人残される。

ここで18カ月にわたるミルトンの生活に終止符が打たれ、マーガレットはシヨウ家の人たちと生活をするため、再びロンドンへ向かった。

5. 再びロンドンで

ミルトンでの様々な苦しみ、困難を抱えた労働者の生活を目の当たりにしたマーガレットにとって、もはや南のロンドンでの生活は先頃までの社交中心の優雅な日々と同じものにはなり得なかった。マーガレットは当時知ろうとしなかった地下の世界に住む人々（本稿34頁参照）の中に自らの意志で入り、彼らが抱える苦痛や苦悩を分かちあおうとするのだった。

ギヤスケルは「マーガレットの奥底に潜んでいたワシテ¹¹そのものが頭をもたげ、自分の感情を表さずにはいられなかった」(459)と述べて、ロンドンでのマーガレットを弁護している。さらに、両親を失ったマーガレットの親代わりとなったミスター・ベルが亡くなり、彼女はミルトンの土地を含めて総計4万ポンドを超える遺産を相続する。ボナパルトはマーガレットが依存すべき両親を亡くして天涯孤独となったことは親の枠組みから解放されて、「自由に行動する権利」を獲得したと両親との別れをとらえる。続いて、ミスター・ベルの遺産を相続したことによりただ単に自由に主張するだけでなく、実際に行動する力という男性的必須要素をマーガレットは手にしたとする¹²。マーガレットはミルトンで様々な人々を知り、自己の世界と他者とははっきりと認識する時間を与えられ、真に自立することを知ったのである。その姿は、もはやイーディスのインド製のショールを肩にかけて静かに立っていた受動的なマーガレットではなかった。

ミルトンに滞在中、マーガレットは工場で働く労働者は幼い子供のように、雇用者の言うことに従えばよく、また、子供に物の道理を説く必要がないのと同様、労働者にも説明する必要がないと専制的な主張をしていたソントンに、マーガレットは「それぞれの人権 — 雇用者の人権と労働者の人権」を説き、「私はあなたの独裁礼讃と、他の人の独立性を調和させようとしているのです」(164,167,170)と、ヒギンズをはじめとするミルトンの労働者への理解を求めていた。ストライキの後、マーガレットは職を求めるヒギンズにソントンの工場で働くように勧める。それを機に、ソントンはヒギンズの率直で私欲なく、また公平なもの見方に心ひかれ、以後、二人は雇用者と労働者として対等な関係を持つようになる。それはソントンの工場に労働者の食堂が設置され、その運営は労働者自身が行う、という今までに見られない革新的な形態で両者の融合が実を結ぶ。

しかしソートンは、長引いたストライキの影響、アイルランド人の職工の技術不足、また、綿の価格が暴落という不景気の時代の到来という様々な不安定要素に加え、多大な機械投資をしていた。そのため、彼は工場の倒産の危機を迎える。ヒギンズをはじめとする労働者たちは滞る賃金に耐え、万が一工場が倒産し、再生された暁には自分たちは喜んでソートンのもつとで働くとし出るほどまでに両者の関係は信頼で結ばれるようになる。

一方マーガレットには気がかりとなることがあった。それは、マーガレットには海軍少尉の兄フレデリック (Frederick) がいた。彼は船上で反乱の首謀者とみなされ、スペインに逃亡していた。帰国の報が流れれば死刑は免れないのだが、母親の重態の知らせを聞いて危険を冒してミルトンを訪ねていた。そして、父親、マーガレットと共に母を見送ったのだった。母が亡くなりフレデリックがミルトンを去ろうとした時、反乱が起きた同じ船の乗組員のレナード (Leonard) に馱で見られていた。追って来たレナードを兄がふりはらった時、レナードは線路に落ち、入ってきた汽車とぶつかる。マーガレットはその現場に居合わせるが、兄はどうかロンドンへ向けて出発できた。しかし、後にレナードは亡くなり、その嫌疑がフレデリックにかかる。マーガレットは彼のミルトン訪問は秘密にしなければならず、その後の警察の調べにもレナードが線路に転落した現場に居合わせていないと嘘を通した。偶然ソートンは、馱でフレデリックと一緒にいるマーガレットを見かけたのだが、レナードの死の原因は解明できなかったため、彼はレナードの死とフレデリックとの関連性を無関係であると治安判事として判断する。マーガレットは改めて、自分の兄の窮地を救ってくれたソートンへの感謝の気持ちとまた、彼との今迄の関係—反発しながらもミルトンでは今まで従属することなく互に対等に意見を交わしあったこと、加えて亡くなった両親への温かな配慮を思い出すのだった。そして自分の奥底に潜む彼への愛に気づくのであった。

フレデリックは無事スペインに戻り、その地の恋人と結ばれ、彼女の父親の商売を継いで、再びイギリスに戻ることはないという報が届く。一時はマーガレットが軽蔑していた商売を最愛の兄が^{なりわい}生業とするという。この事実は、従来の伝統的な意識に縛られることなく、様々な人々と信頼と相互理解とで結びつくべきであるというマーガレットの意識変化へとさらに一層拍車をかけることとなった。

そうした折、ロンドンの家で議員を招いたパーティの席でソントンと顔を合わせ、彼が労働者とのあり方を語るのをマーガレットは耳にする。

「私の唯一の望みは、単なる金銭感覚を超えて雇い主と働く人たちとの付き合いを深める機会を持ちたい・・・私たちは互いにもっと理解すべきだ。あえて言うなら、互いにもっと好きになるべきなのだ」(525)

このソントンの発言はまさに、マーガレットが望んだ関係であり、今まで労働者に従属を要求するばかりであったソントンの変容を目の当たりにして、マーガレットは心打たれる。その後マーガレットはソントンにミスター・バルから相続した遺産を彼の工場に資金を提供したいと申し出る。彼はそれを受け入れて倒産の危機を脱する。同時に二人は互いへの愛を確認して物語を終える。

6. おわりに

A・イースン (Angus Esson) は『北と南』の小説は一人の人間が精神的に闘うドラマであると述べ、マーガレットが意識を目覚めさせながら、環境を素早く受容し、様々な経験を広げてゆく物語であると述べる¹³。A・W・ウォード (Adolphus W. Ward)、A・ホプキンズ (Anett Hopkins)、そしてポラードも一様にマーガレットの成長の物語としてこの小説の位置づけをしている¹⁴。

確かに今まで考察してきたように、本作品では南の伝統的な社会、かつ上流社会という閉鎖的な世界、そこでは男性に盲目的に従属する女性こそ理想の女性であると信じられた世界に生きてきたマーガレットが、北の革新的な産業都市ミルトンへ移動したことで、従来の概念で抱く偏見を正してゆく姿が描かれている。同時に彼女の中で眠っていた強さ、独立心がミルトンという革新性あふれる地で目覚める様子が描かれている。

『北と南』はただ単に地理的に南から北へ移動する物語ではなく、南から北へ移動することで一人の娘マーガレット・ヘイルが、一人の女性へと精神的に変化する旅の物語といえることができよう。こうした旅をしたのは南出身のマーガレットだけでない。それは北に住み、北の代表者と目されるほどのソントン自身も、南のマーガレットから、労働者も自分たち雇用者と同じ人権を持つ人間であり、平等であるという示唆を受けたことが契機となり、

変化し、前進する旅を経験することとなったのである。

こうした南の伝統的社會出身の女性マーガレットと、北の新興ブルジョワジー社會出身のソーントンの意識変容の旅の大きな触媒の役割を果たしたのは、ミルトンの労働者のヒギンズであった。それはマーガレットにヒギンズが『北と南の人間がミルトンという町で出会った』(112)と表現した言葉の中に集約されている¹⁵。

これからマーガレットとソーントンはどのような旅を続けるのであろうか。それは南の価値観を代表するミセス・ショウト、北の価値観を示すミセス・ソーントンを引きあいに出して語られる以下の二人の会話が示すように、二人の男性と女性の対等な人間の旅になるに違いない。

「ショウ叔母様は何というでしょう」

「私には想像できる。『あの男と!』とまず言うだろうね」

「しー!あなたのお母様は『あの女と!』怒った口調でいわれるでしょうね」
(530)

(Endnotes)

- ¹ ギヤスケルの小説の中で最も読まれている『克蘭フォード、*Cranford* (1851-53)』でも、マンチェスターは名前をドランプル (Drumble) として登場している。
- ² ビエール・クースティアス、ジャン・P・プチ、ジャン・レイモン著、小池滋、白田昭訳『19世紀のイギリス小説』(南雲堂、1990年)、176。
- ³ Elizabeth Gaskell, *North and South*, ed. Dorothy Collin (London: Penguin Books, 1970). 以後作品中の引用は上記より引用し、文中の番号はその引用ページである。また日本語の訳は拙訳であることをお断りしておく。
- ⁴ Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (London: Faber & Faber, 1993), 376.
- ⁵ Arthur Pollard, *Mrs. Gaskell: Novelist & Biographer* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1967), 114.
- ⁶ Felicia Bonapart, *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon* (Charlottesville: The University Press of Virginia, 1992), 183-189. Carol Lansbury, *Elizabeth Gaskell: The Novel of Social Crisis* (London: Paul Elek, 1984), 98. イギリスの南部を女性性、北部を男性性と見なすのは、他にルイ・カザミアン (『イギリスの社會小説 (1830~1850)』研究社、1958) がいる。
- ⁷ しかし、ミセス・ヘイルはまっすぐミルトンへは入らず、ディクソン (Dixon) と、ミルトンに近い海岸の街ヘストン (Heston) で、ミスター・ヘイルとマーガレッ

トがミルトンでの住まいを見つけるのを待つ。第7章

- ⁸ Uglow, 370. ミセス・ヘイルがバラで囲まれるヘルストンの牧師館を好まなかったのも、バラの棘が彼女を痛めつける、という解釈もできよう。
- ⁹ John Geoffrey Sharps, *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works* (Sussex: Fontwell, 1970), 211.
- ¹⁰ 後にミルトンで体調を崩した母親の深刻な病状が主治医から告げられるのも、夫のミスター・ヘイルではなく、マーガレットである。
- ¹¹ 『旧約聖書』 エステル記第1章9-22節1、9-22。ペルシャ王アハシュロスの王妃で気の強い女性を象徴する。
- ¹² Bonapart, 232, 233.
- ¹³ Angus Esson, *Elizabeth Gaskell* (London: Routledge & Kegan Paul Ltd, 1979), 90.
- ¹⁴ A.B.Hopkins, Elizabeth Gaskell: *Her Life and Work* (London: John Lehmann, 1952), 139. A.W.Ward., ed. *The Works of Mrs. Gaskell*. 8 vols. The Knutsford Edition, 1906; rpt. (New York: AMS Press, 1972), xxiv. Pollard, 110, 111.
- ¹⁵ ヒギンズの役割については拙論『『北と南』—労働者ヒギンズの役割』『エリザベス・ギヤスケル—孤独と共感』(開文社、2009年)、61-87に言及している。